頸動脈洞反射（けいどうみゃくどう）

どこに病魔が潜んでいるか分からないものだ。日常生活の細やかな変化でさえ、災難を招くひきがねとなりうる。

71歳のSさんの話。時間はかかったが、なんとか聞き出せた。ある日、知人のお通夜に行かなければならなくなった。太くなった体をようやくシャツに押し込んだが、首のボタンが止まらない。そこは、ネクタイを締めて、なんとかごまかした。車に乗り込んで、後ろを向いてものを取ろうとした。途端、目がかすんで、頭がボーっとする。繰り返すと、同じことが起きたという。なら、Sさんは、「頸動脈洞（けいどうみゃくどう）反射による失神」をおこしかけたのかもしれない。

喉仏の横を走る頸動脈の分岐部に頸動脈洞という圧受容体がある。圧迫されると、反射的に迷走神経が興奮する。と、心拍数が減り、血圧は低下して脳の血流が少なくなる。ふらつきやめまい感、ひどくなれば失神するのだ。Sさんの場合は、ネクタイで絞めつけられたうえ、後ろを向くことでさらに首が圧迫された。それで、頸動脈洞が強く刺激され、失神を起こしかけたのだろう。もしも運転中に後ろを向いたりしていれば、自分の葬式を出す羽目になったかもしれない。ゾッとする。

頸動脈洞反射による失神は、稀（まれ）なものではない。女性が、洗髪のため首を過度に後屈されたことで失神しかけた例もある。また、甲状腺や首のリンパ腺腫大などによって頸動脈洞反射が認められることもあるという。

ことに高齢者では、もともと脳血流が低下していて、めまいやふらつき、失神を起こしやすい。重大な病気を隠し持っていることも少なくない。でも、日常のこまごまとしたできごとを聞き出すだけで、簡単に診断がつくことがあるのだ。でも、ことに、高齢者の問診は、難しい。医者はいくつになっても泣かされる。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：4/1北國新聞掲載）